

## 【発表論文 1】

# 韓国から見た壬辰倭乱

崔 永昌 (国立晋州博物館)

[原文は韓国語、翻訳：花井みわ (早稲田大学)]

## はじめに

1592年日本の朝鮮侵略から始まった壬辰倭乱は明軍が朝鮮を救援するために参戦したことから、東アジア三カ国の国際戦争に拡大された。7年間済州島を除き韓半島のほぼ全域が戦争の惨禍を被った。壬辰倭乱は朝鮮後期と近・現代韓国人の歴史と記憶に刻印された事件となり、根の深い反日感情や敵対的な対日認識の出発点になったと見ることができる。<sup>1</sup>

16世紀末、東アジア三カ国が韓半島を舞台に激しく戦ったが、韓、中、日の三カ国は、当時は勿論、現在においてもそれぞれ異なる方式で壬辰倭乱を記憶或いは理解している。この戦争に対して三カ国は、壬辰倭乱と丁酉再乱（韓国）、文禄慶長の役（日本）、抗倭援朝（中国）等お互いに異なる名称を使用している。韓国でこの戦争を壬辰倭乱と呼ぶのはその由来が長い。朝鮮時代戦争直後から「壬辰之倭賊」或いは「壬辰之乱」などとして表現したが、しばらくして「壬辰倭乱」として定着された。<sup>2</sup>その後、韓国では壬辰倭乱名称が現在まで400年の間使用されていることから戦争を見る視角が大きく変化しなかったことを表している。<sup>3</sup>

壬辰倭乱と関連した多くの研究成果が蓄積されているにも関わらず、近代植民地経験による反日感情と歴史的・政治的目的などに関連して韓国では壬辰倭乱理解に最も大きな影響を与えているのが国難克服史観である。一般国民の理解や放送、映画等の大衆文化の次元から見ると返ってその影響力が絶大であると言える。最近になって一国史的観点から脱し、東アジアの視角から壬辰倭乱を見ようとする主張と試みが力を得ているが、民族主義と国難克服史観に立脚した壬辰倭乱に対する理解は依然として強固に根を下ろしている。本発表では朝鮮後期から現代まで韓国における壬辰倭乱に対する記憶と理解を紹介し、そこに現れる問題点とそれを改善するための課題を考えたい。

## 1. 朝鮮後期の壬辰倭乱認識

壬辰倭乱は精神的・物質的に朝鮮に莫大な被害を与えた。朝鮮政府が戦争直前に把握した人口（1000万）と土地（500万結）が戦争直後に、それぞれ約7分の1（150万）と10分の1（50万結余り）に減少するほど疲弊させられた。<sup>4</sup>人命被害と日本に捕虜された人数は、推し量ることが難しいほどで

<sup>1</sup> 이규배, 「조선시대 적대적 對日 인식에 관한 고찰-임진왜란~조선시대 말기를 중심으로」, 『군사』 84, 2012.

<sup>2</sup> 『광해군일기』와 『선조수정실록』에 ‘壬辰倭亂’이란 용어가 처음 등장하는 것으로 보아, 『광해군일기』가 편찬된 인조(재위 1623~1649)대부터 사용된 것으로 보인다.

<sup>3</sup> 오종록, 『여러 얼굴의 전쟁, 임진왜란』, 『내일을 여는 역사』 1, 2000.

<sup>4</sup> 강응천·한명기 외, 『인포그래픽으로 보는 임진왜란』, 『16세기-성리학 유포의아』(‘민음 한국사’ 조선 02), 2014.

あった。しかし、朝鮮王室に最も衝撃を与えた事件は日本軍がソウル占領期間中、朝鮮の第9代王である成宗と11代王である中宗の能人宣陵と靖陵を暴いた事件であった。これにより、壬辰倭乱当時、日本とは「不倶戴天の敵」という認識が生まれ、このような認識は旧韓末まで続いた。

そして、壬辰倭乱に対する国難克服史観は近代歴史学が導入された日本植民地期を経て1950年～70年代を経て確立されたが、国難克服史の観点から壬辰倭乱を見る視角は朝鮮時代まで遡る。壬辰倭乱当時、朝鮮の王であった宣祖の廟号は、元々は宣宗であったが、1616年（光海君8）に宣祖に格上げされた。<sup>5</sup>「祖」は、新しい王朝を創建した王に使うもので、滅亡の危機にあった王朝を救った宣祖を君主として評価したことを表している。

## (1) 国家次元の壬辰倭乱に対する追慕と記憶の造り

1604年（宣祖37）の扈聖・宣武・清難功臣冊封<sup>6</sup>で現れたように、朝鮮朝廷は壬辰倭乱を記憶して追認する手順を進めていた。<sup>7</sup>扈聖功臣86名、宣武功臣18名、清難功臣6人が冊封されたが、宣武功臣の内の武功を立てた人は14人に過ぎなかった。何よりも宣武功臣よりも扈聖功臣が圧倒的に多かったことは宣祖の壬辰倭乱に対する認識を示している。<sup>8</sup>

「中国の軍隊の力がなければ倭敵をどのようにして退けたのであろうか。領土を回復したのは、すべて中国軍の功である。我が国の人が出たことはない。…数年間防守した功はあえて全くないとは言えないだろう。」<sup>9</sup>

宣祖は、このように朝鮮の官軍や義兵の功労を認めず、最初の宣武功臣候補は李舜臣を含む4人だけを挙げる程度であった。宣祖は壬辰倭乱克服に明軍の功労が絶大であり、自分を義州まで随行して明軍を呼んで来たことに貢献した臣下たちの功労が最も大きいと認識した。そのため、自分自身を義州まで護送した功労として内侍らまでを扈聖功臣に冊封したが、鄭仁弘・金沔・郭再祐・金千鎰・趙憲などの義兵將たちを除いたため、功臣冊封過程において多くの論争を引き起こした。<sup>10</sup>これを補完するため、1605年（宣祖38）戦闘で功を立てた人や軍需品を助けた9060人を宣武原従功臣として録勲する措置を下した。<sup>11</sup>鄭仁弘・郭再祐・金千鎰・趙憲などはこの時宣武原従功臣1等に名を挙げられた。

朝鮮王朝は性理学的倫理に立脚した統治体制の整備のために壬辰倭乱当時忠臣と孝子・烈女の行跡を発掘して褒賞する一方、これを伝えるために1617年（光海君9）『東國新統三綱行実図』を編纂・刊行した。三国時代から朝鮮時代までの人物を対象に合計1587件の忠臣・孝子・烈女の事例が収録されたが、壬辰倭乱の時、日本軍によって被害を受けた事例は全体の3分の1を超える576件であった。<sup>12</sup>また、壬辰倭乱当時主な戦場となった慶尚道と全羅道の事例が多く、身分は両班と良人の事例が圧倒的に多かった。朝鮮社会で忠臣・孝子・烈女に選定されることは家門の位相を表わして確認を受ける良い機会であった。

仁祖反正以後も壬辰倭乱に対する記憶を追認して補完する作業は継続された。壬辰倭乱以後の最初の周甲である1652年（孝宗3）から始め、第5周甲である1892年（高宗29）まで毎周甲ごとに戦

<sup>5</sup> 『광해군일기』 권 106, 광해군 8년(1616) 8월 4일 임인.

<sup>6</sup> 『선조실록』 권 175, 선조 37년(1604) 6월 25일 갑진.

<sup>7</sup> 김강식, 「조선후기의 임진왜란 기억과 의미」, 『지역과 역사』 31, 2012.

<sup>8</sup> 오종복, 「보통 장수에서 구국의 영웅으로-조선후기 이순신에 대한 평가」, 『내일을 여는 역사』 18, 2004.

<sup>9</sup> 『선조실록』 권 135, 선조 34년(1601) 3월 17일 을묘.

<sup>10</sup> 『선조실록』 권 180, 선조 37년(1604) 10월 29일 을해.

<sup>11</sup> 『선조실록』 권 186, 선조 38년(1605) 4월 16일 경신.

<sup>12</sup> 손승철, 「『東國新統三綱行實圖』를 통해 본 임진왜란의 기억」, 『임진왜란과 동아시아세계의 변동』, 경인문화사 2010.

争で殉死した将帥と兵士、功臣たちに対する祭祀を行い、その子孫たちに官職を与え、彼らを祭祀する書院と祠宇を設立した。七百義塚のように壬辰倭乱の時犠牲になった軍民のための国家レベルでの致祭が続く<sup>13</sup>、東萊では壬辰倭乱当時左水營に所属して戦死した軍民たちのために義勇壇を建て祭祀をした。特に純祖・憲宗・哲宗などの政治期には、それまで壬辰倭乱の時殉節したがその功績が認定されなかった各地方の人物の大多数を表彰し、壬辰倭乱時の忠臣と烈士ほぼ人員が追悼の隊列に加わるようになった。

朝鮮後期壬辰倭乱の認識と関連して注目されるのは、政治的状況に応じた李舜臣に対する評価の変化である。李舜臣は19世紀末民族が危機に瀕した時英雄として初めて登場したのではなく、朝鮮時代にすでに英雄として待遇を受けた。<sup>14</sup>もちろん、壬辰倭乱当時李舜臣に対する宣祖と朝廷の評価は分かれたのは事実である。宣武功臣1等に李舜臣とともに彼のライバルである元均も冊封されたのは事実で、当時の雰囲気を知ることができる。李舜臣に対する宣祖の疑いとは異なり、殉国直後統營に建てられた祠堂（忠烈祠）をはじめとして、孝宗の時南海露梁の祠堂（忠烈祠）が再建され、肅宗の時、地域儒生の要請で李舜臣の墓がある牙山に祠堂（顕忠祠）が建てられた。それに先立って、光海君の時『東国新統三綱行実図』を編纂しながら忠臣伝に収録された李舜臣は1643年（仁祖21）に忠武という諡号を受けたことに続き、孝宗から正祖代を経て崇慕は絶頂に達した。孝宗代の「宣祖修正実録」が完成し、李舜臣は名実ともに「壬辰倭乱最高の戦功者」として評価された。光海君、仁祖、孝宗が李舜臣をこのように記念したことには理由があった。光海君は後金の攻撃に対処する必要があり、仁祖が清に降伏した直後であった。孝宗は丙子胡乱で受けた屈辱を晴らす為に積極的に北伐を推進していた状況にあったからである。

李舜臣の位相は肅宗の時「先正」として呼称されるようになって、臣下として享受できる最高の地位に格上げされた。「先正」は故人が「正臣」である意味として宋時烈、宋俊吉等は当時先正として呼ばれた人物である。これに続いて、全羅道の古今島に建てられた関羽廟、すなわち関羽の祠堂に朝鮮將軍の代表として李舜臣が祀られ、李舜臣は朝鮮ではもちろん、私たちの歴史を代表する武将となった<sup>15</sup>。壬辰倭乱のなかで明の軍隊と一緒に朝鮮の中華文化を守護した象徴的人物として李舜臣を再評価したのがこの時期顕彰事業の背景であった。<sup>16</sup>

李舜臣に対する崇慕は英祖を経て正祖の時絶頂に達した。正祖は1793年（正祖17）7月李舜臣を領儀政に追認し、<sup>17</sup>直接神道李舜臣の碑名を作成し、1795年（正祖19）に『李忠武公伝書』を編纂・発刊した。朝鮮時代王の名義で臣下、特に武将の文集が編纂された例や王が臣下の碑文を作成した事例はないという点において特別なことであり、<sup>18</sup>李舜臣は歴史に長く残る英雄であることを国王によって確認されたことになった。

文には宋時烈を、武には李舜臣を大いに顕彰した正祖は『李忠武公伝書』を刊行し、明の神宗皇帝の恩恵を記憶し、丙子胡乱以後朝鮮儒学者の崇明排清の大義名分を継承していく象徴として李舜臣を再評価した。<sup>19</sup>『李忠武公伝書』が発刊されることによって壬辰倭乱当時朝鮮水軍の活躍の様相はそれ以後彼の日記や彼が報告した文書の内容を中心として解釈するしかなかった。それと同時に李舜臣の

<sup>13</sup> 『영조실록』 권 38, 영조 10년(1734) 6월 18일 입술.

<sup>14</sup> 오종록, 앞의 논문, 2004.

<sup>15</sup> 『숙종실록』 권 49, 숙종 36년(1710) 12월 17일 정축.

<sup>16</sup> 이민웅, 『이순신 평전』, 책문, 2012, 417쪽.

<sup>17</sup> 『정조실록』 권 38, 정조 17년(1793) 7월 21일 입자.

<sup>18</sup> 이태진, 「정조대왕의 충무공 이순신 숭모(崇慕)」, 『충무공 이순신과 한국 해양』 제 2호, 해군사관학교 해양연구소, 2015.

<sup>19</sup> 정두희 「이순신에 대한 기억의 역사와 역사화-4 백 년간 이어진 이순신 담론의 계보학」, 『입진왜란 동아시아 삼국전쟁』, 휴머니스트, 2007, 202~203쪽.

ライバルであった元均に対する評価は英・正祖時期を経て最悪の状態に落ちることになった。また、李舜臣の位相が格上げされ、記念活動と追悼が行われた。彼の子孫である徳水李氏は朝鮮後期の代表的武班の家柄となった。なによりも李舜臣の子孫たちが後金との戦争や英祖の時に起こった李麟佐乱で見せた忠誠は「忠臣の家門から忠臣が出る」という当時の人々の考えを立証し、李舜臣が記念碑的人物として崇められることに対して大きな役割を果たした。<sup>20</sup>

もちろん、李舜臣だけでなく、東萊城の戦いで殉死した西人系宋象賢も北伐を推進していた孝宗と宋時烈によって節義の象徴として宣揚された。そして丁酉再乱の当時安陰県監として黄石山を守り、息子と一緒に殉死した郭浚、僧長であった洒溟堂の惟政なども大いに顕彰された。

## (2) 地域社会と個別門中次元における壬辰倭乱に対する理解と記憶の造り

朝鮮後期壬辰倭乱を記憶する努力は、国家次元から始まって地域社会を経て個別門中に拡大されていく様相を見せていた。中央政界から周縁化された嶺南の南人士族の場合、義兵将の子孫の記憶を造り出し、地域社会で基盤を構築して、更には中央政治に再び進出するための土台を造ろうと努力をしていた。

郭再祐が火旺山城を防御して 137 年が過ぎた 1734 年（英祖）に『倡義録』という本が刊行されたが、そこに 1597 年丁酉再乱当時「火旺山城に入って共に苦勞をした人の名簿」という意味の『火旺入城同苦録』が収録されている。『火旺入城同苦録』には、699 人全員の氏名と、字、誕生年、号、居住地などが記録されているが、そのうち最初の章に出てくる 19 人だけは防御使郭再祐軍の組織として具体的な任務を持って編成された人物たちであり、他の 680 人は具体的な任務を持っていない。昌寧の火旺山城から遠く離れた安東（115 人）と慶州（63 人）、ソウル（55 人）の人がたくさん収録されたこの名簿は、実際の火旺山城守備当時作成されたものではない。<sup>21</sup>壬辰倭乱以後に行われた顕彰事業の雰囲気の中で、嶺南第一の義兵将として仰ぎ受けていた郭再祐と自分たちの先祖を関連付けしようとした状況を反映している。<sup>22</sup>『倡義録』の出版を主導した郭再祐の曾孫郭元甲と朴胤光は 1736 年嶺南儒生 4000 人である宋時烈と宋浚吉の文廟従祀反対上書に参加した人物で、『火旺入城同苦録』は、当時の政局を主導していた老論に対抗して嶺南の南人の団結を図るため朴胤光など嶺南の南人が中心人物となって造った、という評価を受けている。<sup>23</sup>

壬辰倭乱当時慶尚右道義兵を総括したのは金沔で、『壬辰倡義時同苦録』も 19 世紀に作られたものと推定される。慶尚左道と右道義兵の義兵関連人物をほとんど網羅した『壬辰倡義時同苦録』には合わせて 162 人が登載されていた。19 世紀には、嶺南の南人の中央政界への進出が事実上閉ざされていた時期で、ここに名前を挙げられることにより郷村社会の中で有力一族としての地位を維持することができた。<sup>24</sup>これと同時に、1799 年（正祖 23）光州に住んでいた高敬命の子孫を中心に先賢の業績を称えるために作成した『湖南節義録』や 1831 年晋州で出版された晋州城の戦いの参加者を記録した「忠烈録」が刊行されたように、地域社会次元で壬辰倭乱を整理する作業が形成された。『湖南節義録』は壬辰倭乱と李適の乱、丁卯・丙子胡乱、李麟佐の乱で功を立てた湖南出身者 1457 人を収録しているが、このうち 946 人が壬辰倭乱関連の人物である。正確性と客観性の側面でも多くの限界を持つ

<sup>20</sup> 오종록, 앞의 논문, 2004, 161 쪽.

<sup>21</sup> 하영휘, 「화왕산성의 기억-신화가 된 의병사의 재조명」, 『입진왜란 동아시아 삼국전쟁』, 휴머니스트, 2007, 122~125 쪽.

<sup>22</sup> 김강식, 「조선후기의 입진왜란 기억과 의미」, 『지역과 역사』 31, 2012, 27 쪽.

<sup>23</sup> 하영휘, 앞의 논문, 126~17 쪽.

<sup>24</sup> 정진영, 「松菴 金沔의 입란 의병활동과 관련 자료의 검토」, 『대구사학』 78, 2005.

た資料であるが、朝鮮後期湖南の士族にとっては壬辰倭乱の時に活動した祖先を認められる作業であったため、互いに名前を挙げようとした。<sup>25</sup>

壬辰倭乱以後壬辰倭乱に対する記録を持っていない個人や門中たちは国の壬辰倭乱顕彰雰囲気の中で実記を編纂して先代の記録を再生しようと試みた。比較的早い時期である 1785 年、慶尚右島義兵将である金沔の『松菴實記』をはじめ壬辰倭乱義兵将に対する実記と遺稿が出版されたが、壬辰倭乱義兵運動から明確な功績が表れなかった地域である慶尚左島から多くの実記が出版されたのが特徴である。また、これらの実記には『同苦録』と同様に、人名のみを羅列した各種『會盟録』が載っている。これは義兵として実際の戦闘に参加していない先祖を記録して、歴史的事実として作ろうとした政治的な努力の産物であり、これにより再び郷村社会で基盤を固めようとした行為であった。<sup>26</sup>

### (3) 歴史小説『壬辰録』を通して見た朝鮮後期民衆の壬辰倭乱に対する理解

壬辰倭乱が終結した後、未曾有の戦乱を体験した民衆たちの認識に反映された歴史小説『壬辰録』が登場した。丙子胡乱(1636)以後 17 世紀中頃、最も早い時期に版本が登場し、現在までハングル或いは漢文で書かれた 70 種類余りの異なる版本が伝えられていた。<sup>27</sup>壬辰倭乱の経験を通じて伝承された排倭的戦争物語は長い間の口承の過程を経て文字として定着し、それがまた継続して書き写されることにより異なる版本が現れた。歴史的事実と合致した内容がある一方、虚構に満ちた版本もある。

最も代表的な版本である国立中央図書版本(漢文版)の場合、虚構的人物である崔日景の誕生から始まって壬辰倭乱勃発と戦争の経過、終戦後状況まで多様な伝説的物語で構成された。複数版本に泗溟堂が日本国を降伏させる物語、金應瑞・姜弘立が日本征伐に乗り出す物語、関雲長が朝鮮軍を陰で助ける物語などが共通して登場する。朝鮮の王と臣下たちを否定的に描いているのも特徴である。特に終戦後、李如松が朝鮮の山と川の脈を切断しようとしたため、太白山山神に叱責され、殺される内容から見ても、日本はもちろん、明まで排除する朝鮮民衆の対外感情を垣間見ることができる。

『壬辰録』に登場する主要人物としては、李舜臣・郭再祐・金徳齡・鄭文孚・趙憲・靈圭・金応瑞・論介・桂月香などである。韓国人将帥を英雄化する作業と日本・中国に対する敵対感情の表れとして特徴される『壬辰録』の内容は、壬辰倭乱という記憶を通して、朝鮮後期民間に形成されていた排他的な民族的一体感を確認させることになった。<sup>28</sup>そして、日本植民地時代禁書として朝鮮総督府によって出版が禁止された壬辰倭乱を英雄主義と一国主義視点から眺めさせられる認識の出発点にもなった。<sup>29</sup>

## 2. 日本植民地期の壬辰倭乱認識

19 世紀末、日本が再び韓国に侵入してから、社会指導層を中心に壬辰倭乱は国民全体が団結した手本としての考えが固まった。日本の植民地に転落する危機の中で、壬辰倭乱は国難克服史の重要なテ

<sup>25</sup> 김강식, 앞의 논문, 35 쪽.

<sup>26</sup> 김강식, 위와 같은 논문, 29~33 쪽.

<sup>27</sup> 소재영·장경남, 『임진왜란사료총서(문학)』 1, 해제 참조, 국립중앙도서관, 2000. 존 B. 던킨은 「임진왜란의 기억과 민족의식 형성-『임진록』 등 민간전승에 나타난 민중의 민족의식」, 『임진왜란 동아시아 삼국전쟁』, 휴머니스트, 2007에서 「임진록」 판본의 수가 40여 개라고 추정하고 있다.

<sup>28</sup> 존 B. 던킨, 앞의 글, 154~163 쪽 참조. 던킨은 『임진록』의 19세기 중엽 판본인 『흑룡록(黑龍錄)』의 분석을 통하여, “『임진록』에 의해 전해진(또는 조작되기도 하였을) 역사적 기억들은 당시 비양반층 사이에서 자신들이 이웃 나라들과 구별되는 사회적·정치적 집단공동체의 일원임을 자각하고 있었음을 잘 보여준다”고 밝히고 있다.

<sup>29</sup> 최원식, 「임진왜란을 다시 생각한다-『수길일대와 임진록』을 읽고」, 『제국 이후의 동아시아』, 창비, 2009; 『수길일대와 임진록-망각된 저술가 현병주의 새로운 시각으로 쓴 임진왜란사』(바오, 2016)에 재수록.

一マとして浮上し、以後支配層・被支配層の区別なく形成された全「民族」が一致団結して国難を克服した代表的な事例として注目されるようになった。この過程で、19世紀しばらく小康状態を見せていた李舜臣の存在感は、20世紀の初め、再びクローズアップされ、関連する著述が相次いで出版された。<sup>30</sup>

### (1) 李舜臣伝記に続く刊行——国難を克服した「民族の英雄」

申采浩は1908年5月2日から8月18日までに「大韓毎日申報」に連載した『朝鮮第一偉人李舜臣伝』をはじめ、日本植民地期に李舜臣を国難克服の「民族の英雄」として強調した伝記物が相次いで出版された。全19章60ページ分量の文章で申采浩は李舜臣を「天が我が国のために輩出した「聖賢」、更には「聖雄」として神格化しようとする傾向を表した。そして李舜臣を英国のネルソン提督と比較して党争の渦の中で国家の支援と協力を受けていない状況の中でも、国難を克服したという点において、ネルソンより素晴らしいと評価した。それと同時に亀甲船は世界鉄甲船の元祖であると高く評価した。

一方、朴殷植も1915年に中国の上海で「李舜臣伝」を発表した。「古今水軍の第一偉人、世界の鉄艦発明始祖」という副題が示すように、李舜臣の偉大さと亀甲船の独創性を強調し、李舜臣と英国のネルソン提督を比較して李舜臣が更に優れた人物であることを強調した点においては、申采浩の著述と文脈を同じくしている。<sup>31</sup>いずれにせよ、20世紀初頭、韓国を代表する二人の学者は、国難を克服した英雄である李舜臣を紹介することで、私たち民族の自尊心を立てようとしたことから、彼らの歴史認識は、20世紀以来ずっとその後の学者たちに大きな影響を及ぼした。20世紀半ば以降、李舜臣に対する聖雄化、更には神格化が進んだ背景には、二人の学者の影響を無視できない。

1924年、李舜臣を「非凡な愛国者」で「正義人道家」とであると絶賛した張道斌の『李舜臣伝』に続き、1925年には、「李舜臣伝」をはじめ、12名の概略的伝記を載せた『朝鮮之偉人』（開闢社）と崔瓊植の『古代小説忠武公李舜臣実記』（博文書館）がそれぞれ出版された。1931年、李允宰は一年前『東亜日報』に連載した文章を単行本に編集し『聖雄李舜臣』（漢城書籍株式会社）を出版した。ハンダ専用活字体と洗練された国版本になり、それまで発刊されただの李舜臣伝に比べても体制が整えられていて、鄭寅普の序文が入っている。これらの本には、困難な時代李舜臣のように聖雄と呼ばれるほどの立派な人物が出てくることを期待し、またそのような人物が、私たちの歴史にかつて存在したという事実を伝えることによって民族的自信を持つようになることを望む願いが込められている。<sup>32</sup>

李允宰に続いて李光洙は長編小説形式の別の『李舜臣伝』を発表した。1931年6月26日から1932年4月3日まで『東亜日報』に178回連載した内容をまとめて1932年『李舜臣』というタイトルで出版した。李光洙の小説『李舜臣』は光復後、1948年永昌書館で再び出版されて以来、1968年、1971年、1995年に続き、2004年にも出版された。李光洙は、現有の歴史学者たちが亀甲船を製造して国難を克服した英雄としての李舜臣を強調したのとは異なり、李舜臣の自己犠牲的「忠義（愛国心）」を表わすために、この小説を書いたと述べた。しかし、李舜臣と柳成龍以外の朝鮮民衆と臣下たちは暇さえあれば逃亡した無能で怠惰的な存在、或いは破廉恥な存在または私利私欲だけに執着する無能で

<sup>30</sup>이민용, 『이순신 평전』, 책문, 2012, 426~430 쪽.

<sup>31</sup>이민용, 위의 책, 426~428 쪽.

<sup>32</sup>정두희, 앞의 논문, 213~214 쪽.

非道徳的存在として表現された。侵略者である豊臣秀吉を含む日本側の問題を取り上げて挙論した部分は見出すことができない。戦争の最大の原因を朝鮮王朝の飽きない腐敗と無能によるものであると考えた李光洙の視点は、彼が 1920 年代『東亜日報』を通じて発表した「民族改造論」の論理と文脈を同じくするものであった。<sup>33</sup>

## (2) 忘れられた著述家玄丙周の『秀吉一代の壬辰録』

日本植民地時代壬辰倭乱史研究は、池内宏など、主に日本の官学者たちが主導したのに対し、国内の学者の研究はほとんど皆無の状況であった。<sup>34</sup>一種の教養書として崔南善が著した『壬辰乱』（1931年）以外の本格的な論文は一篇もない。崔南善の本は壬辰倭乱の伝統的認識に立脚した概略的な概説書であるが、「壬辰役は、腐敗した朝鮮に対する浄化の運命であり、停滞した朝鮮の奮起の時期であったが、朝鮮と朝鮮人はこの歴史的使命において失敗者であった。」（50頁）と述べているなど退行的歴史認識を基にしている。<sup>35</sup>

このような状況で最近新たに発掘された玄丙周の『秀吉一代と壬辰録』（新旧書林、1928）は、20世紀前半壬辰倭乱を扱った著書の中で最も興味深い著作である。<sup>36</sup>『秀吉一代と壬辰録』は上・下 2巻で構成されており、総 200 頁（上編総 88 ページ、下編総 134 ページ）の分量である。1928年に初めて刊行された後、1935年までに 5 版刊行されたことから、当時ある程度人気があったものと思われる。玄丙周は上編で秀吉の誕生から戦国時代を平定した後、朝鮮出兵に乗り出す姿を時期順に沿って述べている。何よりも壬辰倭乱史を述べた下編では朝鮮の立場だけでなく、韓・中・日の東アジア三カ国の資料を参照して客観的に叙述しているのが特徴である。

本の前半部分に、上・下編の参考文献を明らかにしたが、『先祖実録』と柳成龍の『懲毖録』、『李忠武公伝書』など韓国側の記録 10 種余り、デンケイ（天荊）の『西征日記』とゼタク（是琢）の『朝鮮日記』、川口長孺の『征韓偉略』と池内宏の『文祿慶長の役』などの日本資料 10 種余り、『明史』と『神宗實録』、宋應昌の『經略復國要編』、諸葛元聲の『兩朝平壤録』など、中国側の記録 6 種で、多くの資料を渉猟した。また、玄丙周が「著者の編語」の中で「最も事実充実し、できるだけたらめな内容を記録に入れなかった。」というように、史料に対する厳格性を維持しようとしたのが特徴である。

『秀吉一代と壬辰録』は朝鮮後期民族的・民衆的な観点が投影された虚構性が強い小説『壬辰録』を参照していなかった。朝鮮社会に大きな影響力を行使した小説『壬辰録』が史料としての価値がないとの判断と常に朝鮮一国の立場で述べていた壬辰倭乱書史から脱しようとした著者の意図で『壬辰録』を意識的に排除したものであると思われる。<sup>37</sup>実際に本文のところどころにおける著者の注釈では壬辰倭乱を一国ではなく、三カ国の視角、すなわち、東アジアの視点から見ようとした試みを表していた。玄丙周の本で同じ事件に対して三カ国の観点に基づいて解説をする余地がある部分すべてを注

<sup>33</sup>정두희, 위의 논문, 214~218쪽 및 이민웅, 앞의 책, 429~430쪽 참조.

<sup>34</sup>조원래, 「임진왜란사 연구의 현황과 과제」, 『새로운 觀點의 임진왜란사 研究』 아세아문화사, 2005, 13~15 쪽

<sup>35</sup>노영구, 「임진왜란의 학설사적 검토」, 『동아시아 세계와 임진왜란』, 2010, 4 쪽.

<sup>36</sup>현병주(1880~1938)는 일제강점기인 1910~1930년대 저술활동에 매진하여 45권의 방대한 저서를 남긴 인물이다. 현병주는 1920년대 말부터 역사소설과 전쟁실기 저술에 집중하였으며, 임진왜란을 다룬 책으로 『수길일대와 임진록』을 비롯하여 『임진명장 이여송 실기(壬辰名將李如松實記)』(1929), 『순정비화 홍도(純情秘話紅桃)의 일생(一生)』 등을 남겼다. 회계학계에 이어 국문학계에서 그의 저작들에 대하여 관심을 갖고 연구가 진행되었으며, 2016년 『수길일대와 임진록』(마오)이 '망각된 저술가 현병주의 새로운 시각으로 쓴 임진왜란사'란 부제와 함께 다시 출간되었다.

<sup>37</sup>장연연(張燕燕), 「대중계몽주의자 현병주-그의 생애와 계몽담론」, 『수길일대와 임진록』에 대하여, 『수길일대와 임진록』, 마오, 2016, 307~308 쪽.

積を介して明らかにした。<sup>38</sup>そして李舜臣をはじめとするどの将帥や忠臣烈士に対しても英雄化を試みていなかった。本の最後の文章「総評」で豊臣秀吉の朝鮮侵略が朝鮮と明、日本のすべてに被害を及ぼした点を指摘しながらも、彼を断罪だけしなかった点は同じ文脈として理解できる。

「英雄を崇拜する時代が英雄を輩出するという立場から見ると、その時のことを秀吉一人の罪にしても当然であるとしても歴史を科学的に解釈するとすれば、時代が英雄を輩出するもので、秀吉の誤りは当時の時代がある程度負担しなければならない。」<sup>39</sup>

英雄史観を捨てて「科学的」立場から歴史を眺めることを主張した玄丙周の主張は議論の余地がないわけではないが、壬辰倭乱を豊臣秀吉の個人的な欲望に起因したものであると見るより巨視的な視点から眺めることを提案している。<sup>40</sup>

### 3. 大韓民国の壬辰倭乱認識

韓国で壬辰倭乱に関する学術的研究が本格化したのは、1945年以降である。19世紀後半に始まった日本の壬辰倭乱研究は日本が大陸侵略を本格化した始点に合わせて政治・軍事的目的を強く帯びながら行われたように、韓国での壬辰倭乱研究も激変する政治・社会的影響を強く受けた。日本の既存の研究を批判し、意識して行われたことも特徴である。<sup>41</sup>

#### (1) 国難克服史観の台頭と壬辰倭乱(解放～1950年代)

1945年解放と大韓民国建国を迎え、韓国史学界が直面している課題は、日本の植民地史学の克服であった。もちろん解放直後には、混乱した政治状況により、壬辰倭乱の本格的な研究を行うことができなかった。1946年に出版された李允宰の『聖雄李舜臣』と李殷相の『李忠武公一代記』、1952年に李無影の『李舜臣』などいくつかの種類李舜臣伝記が刊行された。1950年震檀学会で共同執筆した『李忠武公』が発刊されたが、国家的危機状況で国難克服の英雄だった李舜臣を再び歴史的に浮上させた。<sup>42</sup>この時期に特に李殷相などが中心になって釜山と慶南・鎭海・巨濟・統營、全羅南道珍島などに忠武公銅像や記念碑を建てた。

新民主主義史学の代表である孫晋泰は1949年に発行した『国史大要』で壬辰倭乱の代わりに「日本との7年戦争」という用語を使用し、「人民軍の決起」という項目において義兵に関して詳しく記述し、倭乱7年史で持つ重要性を力説した。<sup>43</sup>しかし、1950年「六・二五」朝鮮戦争の時孫晋泰・李インヨンなど多数の民族主義歴史家は北朝鮮に渡ったため、彼らの歴史認識は継承・発展されなかった。「六・二五」朝鮮戦争以後、1950年代半ば台頭したのが「国難克服史観」である。この史観によると「国難史は、国史の一部としてそれまで私たち民族が内部的にまたは外部的に経験した国難の記録」である。特に韓国民族が多くの国難を経験しながらも一度も外国に屈したことがなかったことを特記した。しかし、1950年代まで韓国史の分野で壬辰倭乱に対する専門的な研究成果は少なく、通史的な叙述に含まれた壬辰倭乱記述が中心であった。

<sup>38</sup> 장연연, 위의 글, 308~309 쪽.

<sup>39</sup> 현병주, 『수길일대와 임진록-망각된 저술가 현병주의 새로운 시각으로 쓴 임진왜란사』, 바오, 2016, 282~283 쪽.

<sup>40</sup> 장연연, 위의 글, 312~313 쪽; 최원식, 앞의 글, 325~327 쪽.

<sup>41</sup> 장연연, 위의 글, 312~313 쪽; 최원식, 앞의 글, 325~327 쪽.

<sup>42</sup> 이민용, 앞의 책, 431~432 쪽.

<sup>43</sup> 김중권, 「서문(序文)」, 『국난사개관(國難史概觀)」, 명문당, 1956. 1 쪽.

## (2) 民族主義の流れにおける国難克服史観の風靡と壬辰倭乱研究(1960~1970 年代)

1960年「四・一九」革命と1961年「五・一六」軍事政変以降、韓国史学界では、日本の植民地体制と植民地史観に対する全面的な批判とともに韓国史の構造的な発展と民族の優秀性を強調する流れがともに現れた。<sup>44</sup>これに関連して、既存の李舜臣関連研究とともに義兵研究が活性化されたのが、1960年代壬辰倭乱研究の特徴である。

特に崔ヨンヒは、戦乱が頻繁だった韓国史において他民族の占領下の民衆が広範囲で抗争に参加した事例として義兵に注目し、義兵が蜂起した社会的背景と義兵将の性質、義兵の変遷などを全体的に検討した。<sup>45</sup>崔ヨンヒは、義兵を「民族的レジスタンス」と規定し、郷土防衛意識と日本民族に対する韓国民族の感情を壬辰倭乱時期の義兵の思想的基盤として認識した。1950年代国難克服史観の意識が一部現れたが、当時の時代状況を反映して義兵を民族主義的次元で新たに位置づけた。崔ヨンヒの研究は、後の李ジェホ・金ユンゴン・李チャンヒ・崔グムク・宋ジョンヒョン<sup>46</sup>等による義兵に関する様々な検討と各地域の主要な義兵に対する研究が活発に行われる出発点となった。

この時期に集中的に行われた義兵研究は、壬辰倭乱が日本の一方的な勝利だったとする既存の認識を払拭させると同時に、降倭との比較を通じて、精神史的側面から私たちの強靭さを主張する論拠にもなった。<sup>47</sup>これを根拠に「李舜臣・明軍とともに義兵が壬辰倭乱克服の主役であった。」とする義兵中心の壬辰倭乱認識が形成された。「無気力」な朝鮮の官軍の代わりに、義兵が陸上戦闘において遊撃戦術で日本軍に大きな打撃を与えたという認識を示している。<sup>48</sup>

その一方、この時期注目すべき研究成果として、李ヒョンソクの『壬辰戦乱史』(上・下)がある。<sup>49</sup>国内外の膨大な文献史料を収集・引用して著した1900ページに及ぶ膨大な著書であり、戦闘史を中心に壬辰倭乱に対する総合的な整理を試みた。

1970年代許善道は義兵活動を単に郷村地域の士族と農民が糾合した民族抗争として理解していたことから脱して、義兵活動が徐々に国家の一定の調整と制御を受けたことを明らかにした。<sup>50</sup>明の軍隊の派兵に関する検討も1970年代に形成し始めた。ユグソンは明軍の派兵過程と明軍の民間人被害などの問題を整理し、<sup>51</sup>明・清史研究者である崔ソザは明軍の派兵は、朝鮮の要請ではあるが、同時に戦争が明の本土に拡大され、北京一帯が脅かされる事態を防ぐためのものであったという主張を提起した。<sup>52</sup>これにより壬辰倭乱の性格を単に日本の朝鮮侵略と朝鮮の応戦という民族史的視点から脱して、明を含む東アジアの国際戦争という視点を確保することができる契機が用意された。<sup>53</sup>

しかし、このような研究の進展にもかかわらず、維新政権に代表される1970年代の状況では、壬辰倭乱の理解と研究を歪曲させるしかなかった。「国籍教育」と「主体的民族史観」の樹立を強調した維新政権はこれを実現するために国史教育の強化とともに護国文化遺跡の復元と整備、国家主義に立脚した忠孝思想の強調や教育などを国家次元で推進した。また、北朝鮮の攻勢的な対南政策と1975

<sup>44</sup> 노영구, 앞의 글, 8~9 쪽.

<sup>45</sup> 최영희, 「임란의병의 성격」, 『史學研究』 8, 1960.

<sup>46</sup> 김윤곤 「곽재우의 의병활동-특히 조직과 戰術·戰略을 중심으로」, 『역사학보』 33, 1967; 이재호, 「임란 의병의 일고찰-특히 관군과 명군과의 관계를 중심으로」, 『역사학보』 35-36, 1967; 이장희, 「임란 해서 의병에 대한 일고찰-연안대첩을 중심으로」, 『사총』 14, 1969; 최근목, 「임란때의 湖西의병에 대하여」, 『논문집』 9(충남대), 1970; 송정현, 「임진왜란과 호남의병」, 『역사학연구』 4, 1972.

<sup>47</sup> 이장희, 「왜란과 호란」, 『한국사연구집문』(2판), 지식산업사, 1987, 320쪽.

<sup>48</sup> 한우근, 「국사」, 을유문화사, 1968, 156~157 쪽.

<sup>49</sup> 이형석, 『壬辰戰亂史』 상·하, 임진전란사간행위원회, 1967년. 이 책은 1974년 다시 전 3권(상·중·하)으로 증보개정판이 발간되었다.

<sup>50</sup> 허선도, 「鶴峰先生과 임진의병활동」, 『國譯 鶴峰全集』(국역학봉전집편찬위원회), 1976.

<sup>51</sup> 유구성, 「壬亂時 明兵의 來援考-朝鮮의 被害를 中心으로」, 『사총』 20, 1976.

<sup>52</sup> 최소자, 「임진란시 명의 파병에 대한 논고」, 『동양사학연구』 11, 1977.

<sup>53</sup> 노영구, 앞의 글, 13~14 쪽.

年南ベトナム敗北など急変する国内外の情勢を契機に国難克服史観<sup>54</sup>が再登場した。韓民族の歴史を異民族の侵略に対する抵抗の歴史として見る国難克服史の観点から戦争史は常に初期敗戦に続き全民族の団結による抗戦という方式で述べており、これは壬辰倭乱の国難克服史観の認識をよく示す。このような国難克服史的認識は1979年に維新政権が崩壊した後も完全に払拭されず、それ以後の壬辰倭乱研究と国史、国民倫理などいわゆる国定科目を通じて存続し、一般的な認識として定着された。<sup>55</sup>

何よりも、1960年代と1970年代には、朴正熙大統領が主導した李舜臣に対する国家的顕彰事業が行われた。始祖詩人で小説家である李殷相を除いて、崔ヨンヒ、趙ソンドなどのような歴史学者たちもこの事業に参加し、李舜臣の聖雄化過程に一定程度寄与した。国が主導して顕忠祠と閑山島・制勝堂など李舜臣関連遺跡の聖域化事業を広げて、全国のほとんどの小学校に世宗大王と忠武公銅像を建てた。しかし、結果的に李舜臣に対する過度の美化、聖雄化事業は、後に壬辰倭乱と李舜臣に関する歴史研究を妨げる障害物として作用することになった。<sup>56</sup>

### (3) 民主化と新しい壬辰倭乱認識の台頭(1980~1990年代)

維新体制崩壊後の1987年6月、民主抗争として手続き的民主主義が確立される中で、民衆を变革の主体として認識して歴史研究の主な対象とする民衆史学論が提起されて壬辰倭乱研究でも、新しい傾向が現れた。1980年李泰晋は朝鮮の敗北として終わったと認識された壬辰倭乱理解に問題提起をし、朝鮮官軍の初期敗北の原因を16世紀除清政治の弊政による朝鮮初期の軍事制度の崩壊において求めた。同時に、それまでの壬辰倭乱研究で注目されていなかった朝鮮と日本の戦術と兵器体制に対する理解を促した。<sup>57</sup>1985年、許善道は、既存の研究で見られた「殉國史観」や「英雄史観」を止揚し戦争史の立場から軍制、軍需、武器、戦術、官房、情報などの各分野に対する客観的な研究を通じて壬辰倭乱を新たに理解するべきであると主張した。<sup>58</sup>しかし、壬辰倭乱の理解を全面的に変化させることができず、<sup>59</sup>1980年代義兵研究でも1970年代の国難克服史的歴史認識を完全に克服できなかった。

1991年の地方議会の構成と1995年の自治団体長選挙など地方自治体が復活することにより、地域史に対する関心も高まるようになった。このことは、壬辰倭乱研究にも影響を及ぼし、地域義兵部隊の活動についての研究が進められた。<sup>60</sup>著名な義兵将研究から脱して、小規模の農村史料を活用した小規模義兵部隊と義兵将に対するマイクロ分析を試みることにより、義兵の性格として義兵と郷兵の二つの形態があったことを明らかにした。また、総村社会史研究の一環として、壬辰倭乱時期在地士族の農村支配体制が義兵の募集と活動の主要な基盤であったことを分析した研究も発表された。<sup>61</sup>

壬辰倭乱勃発400周年となる1992年を起点に壬辰倭乱に対する一般人の関心も高まり、研究分野も多様になった。国史編纂委員会は、『韓国史論』22号(1992年)「壬辰倭乱の再検討」特集では、従来の義兵のほか官軍の活動、明軍の参戦、捕虜人、壬辰倭乱期全朝鮮の国防の実態、豊臣秀吉の対外政策など、様々な側面を検討した。1990年代に入って壬辰倭乱当時の日記をはじめ、農村と門中資

<sup>54</sup>이선근, 『한민족의 국난극복사』, 휘문출판사, 1978; 이재호, 「『한민족의 국난극복사』 서평」,

<sup>55</sup>노영구, 앞의 글, 15 쪽.

<sup>56</sup>이민용, 앞의 책, 432~434 쪽.

<sup>57</sup>이태진, 「임진왜란에 대한 이해의 몇가지 문제」, 『군사』 창간호, 1980.

<sup>58</sup>허선도, 「임진왜란론-올바르고 새로운 인식」, 『천관우선생 환력기념 한국사학논총』, 1985.

<sup>59</sup>노영구, 앞의 글, 18 쪽.

<sup>60</sup>조원래, 「임란 해전과 홍양수군」, 『남도문화연구』 2, 1986; 나중우, 「임란의병과 장성남문 창의」, 『향토문화연구』 4, 1987; 조원래, 「나주지방 사례로 본 임란의병 연구과제」, 『나주목의 재조명』 (목포대 박물관), 1989; 김석희, 「임진왜란과 청도지역의 창의활동」, 『부산사학』 23, 1992 등 다수.

<sup>61</sup>정진영, 「임란전후 尙州지방 사족의 동향」, 『민족문화논총』 8, 1987; 고석규, 「정인홍의 의병활동과 山林기반」, 『한국학보』 51, 1988.

料が幅広く活用され始めた。この過程で、義兵の主力が単純な農民ではなく、官軍から離脱した「逋將」や落伍兵士である「散卒」であったことが究明された。<sup>62</sup>これと共に義兵の兵糧や武器などが政府側から積極的に支援され、これは当時の義兵と官軍の不可分性を見せることで理解された。

以降、義兵研究でも戦争史的な視点を確保しつつ、国難克服史観的な視覚の克服が試みられた。<sup>63</sup>壬辰倭乱当時、戦争体験と個人の生活を記録した実記資料が研究に活用されるようになり、北島万次など壬辰倭乱専門の日本人研究者たちの研究成果や関連資料が紹介され、日本側の資料に対する関心も高まり始めた。門中や人物を中心とする壬辰倭乱研究が続けられたが、朝鮮軍の火薬兵器に対する研究、<sup>64</sup>朝鮮軍の戦略・戦術、<sup>65</sup>築城<sup>66</sup>など壬辰倭乱を戦争史的視点から考察した研究も現れた。特に水軍と義兵研究に隠れ注目されなかった官軍と明軍に対する研究が本格化し、義兵と水軍中心の壬辰倭乱史認識が持つ限界を克服し、戦争が持つ様々な性格に注目し始めた。<sup>67</sup>特に韓ミョンギは本格的に明朝軍の参戦とこれに伴う政治、経済、社会的影響を分析した研究成果を発表して、<sup>68</sup>壬辰倭乱史の研究に少なからぬ影響を及ぼした。官軍と明軍に関する研究は、1980年代までの研究でしばしば見られる「(壬辰倭乱当時) 正規軍としての官軍の存在がほとんどなかった。」とする否定的な認識を克服する契機になったという点において意義がある。<sup>69</sup>

#### (4) 東アジア史的観点における壬辰倭乱認識の模索(2000年代以降)

1980年代に提起された戦争史視点からの壬辰倭乱研究が、2000年以降の主な傾向を形成するようになった。2004年に出版された『軍史』51号の「壬辰倭乱の再検討」特集で壬辰倭乱時期、朝・明連合軍の騎兵作戦、亀甲船、海戦に対する考察を通して見る、朝・明・日三カ国の戦略戦術の比較、武器体制、短兵器、晋州城戦闘など戦争史関連のさまざまな主題の研究を収録した代表的研究がある。

一方、1990年代後半にグローバル化の進展に伴い、既存のヨーロッパ中心の世界史から脱しようとするいわゆるグローバルヒストリーが登場した。これによって、民族主義史観に立脚していた既存の韓国史理解に対する本格的な批判が提起され、壬辰倭乱も韓・中・日の三カ国が参戦した東アジアの国際戦争という観点から見る研究が現れた。2006年6月に慶尚南道統営で「壬辰倭乱：朝日戦争で、東アジア三カ国の戦争」をテーマに開かれた国際学術会議で発表された論文を編集して、2007年に出版した研究成果がその代表的研究である。<sup>70</sup>これと同時に15世紀後半以降大航海時代の余波で、ポルトガルとスペインの勢力が、東アジアまで押し寄せて来てから、銀を媒介にして、欧州と中国が連結されていた流動的な国際秩序と関連して壬辰倭乱を説明する研究も現れた。<sup>71</sup>2000年代の二度にわたる日韓歴史共同研究も壬辰倭乱に対する理解の幅を広げることに役だった。<sup>72</sup>

<sup>62</sup> 이수건, 「月谷 禹拜善의 壬辰倭亂 義兵活動; 그의 『倡義遺錄』을 중심으로」, 『민족문화논총』 13, 1992.

<sup>63</sup> 노영구, 앞의 글, 22 쪽.

<sup>64</sup> 박제광, 「임진왜란기 조선군의 화약병기에 대한 일고찰」, 『군사』 30, 1995.

<sup>65</sup> 이장희, 「왜군격퇴의 戰略·戰術」, 『한국사』 29, 1995; 노영구, 「선조대 紀效新書의 보급과 陣法 논의」, 『군사』 34, 1997; 강성문, 「행주대첩에서의 권율의 전략과 전술」, 『임진왜란과 권율』, 전쟁기념관, 1999.

<sup>66</sup> 이장희, 「壬亂中 山城修築과 堅壁淸野에 대하여」, 『阜村申延澈教授停年退任紀念 史學論叢』, 1995.

<sup>67</sup> 조원래, 「명군의 출병과 임란전국의 주이」, 『한국사론』 22, 1992; 장학근, 「임진왜란기 관군의 활약」, 『한국사론』 22, 1992; 한명기, 「임진왜란 시기 명군 참전의 사회 문화적 영향」, 『군사』 35, 1997; 박제광, 「임란 초기 전투에서의 官軍의 활동과 권율」, 『임진왜란과 권율』, 전쟁기념관, 1999.

<sup>68</sup> 한명기, 「임진왜란과 한중관계」, 역사비평사, 1999.

<sup>69</sup> 노영구, 앞의 글, 24 쪽.

<sup>70</sup> 정두희·이경순 엮음, 『임진왜란과 동아시아 삼국전쟁』, 휴머니스트, 2007.

<sup>71</sup> 한명기, 「임진왜란과 동아시아 질서」, 『임진왜란과 한일관계』, 경인문화사, 2005; 강웅천·한명기 외, 「동아시아 7년 전쟁」, 『16세기-성리학 유포의아』 ('민음 한국사' 조선02), 2014.

<sup>72</sup> 제1기 한일역사공동위원회(2002.5.~2005.3.)와 제2기 한일역사공동위원회(2007.6.~2009.11.)는 2005년과 2010년 각각 6권과 7권의 공동연구보고서를 펴냈다. 이와 함께 제1·2기 한일역사공동위원회 한국 측 위원회는 공동주제에 대한 심화연구 결과물을 묶어 「한일관계사연구논집」(경인문화사)을 발간하였다. 2005년과 2010년 각 10권씩 모두 20권이 나왔다.

また、朝鮮軍の無気力な対応と敗戦として認識されていた壬辰倭乱初期様相に対する根本的な批判も試みるようになった。蘆ヨングは朝鮮軍の初期敗戦を朝鮮の軍事動員体制の問題と軍事力未確保の側面で認識していたことから脱して、朝鮮軍の初期対応と動員体制は適当に稼働されたが、戦術の衰弱性により、敗北は避けられなかったこととして理解した。<sup>73</sup>また、これまで義兵の組織が士林主導の下、郷村の住民と賤民など下層民が参与したという視点から脱して、落伍した官軍のいわゆる「散卒」が主力であり、このような準官軍的属性は、彼らの活動情況が朝鮮前期地方軍事システムである鎮管体制の基で形成されたと主張した。<sup>74</sup>このように義兵の性格に対する再検討を促した研究とともに既存の壬辰倭乱関連史料に対する批判的な考察が提起されている。<sup>75</sup>

これまで壬辰倭乱研究史研究では興味としてしか示さなかった倭城と講和交渉等に対する本格的な成果<sup>76</sup>が発表され、2012年壬辰倭乱7周年(420年)を契機に、社団法人壬辰乱精神文化宣揚会を中心として地域義兵将に対する研究も持続されている。しかし、自治体の後援を受けて行われている地域義兵将と李舜臣に対する研究の場合、依然として国難克服史的認識が見られるのが、21世紀の韓国における壬辰倭乱研究の現状である。<sup>77</sup>

## 4. 結論

朝鮮時代から現在に至るまで、韓国における壬辰倭乱に関する研究史と認識をもとに、いくつかの問題点と課題を指摘し、結びに代えたい。

第一に、壬辰倭乱の多くの研究成果が蓄積され、さまざまな側面が明らかになり、様々な視点も提示された。しかし、壬辰倭乱という名称が揺らぐことなく使われているように、政治的な目的に関連して、壬辰倭乱を「国難克服史」の主要なテーマとして扱う風潮はまだ解消されていない。これは軍事政権の時期、壬辰倭乱が国難克服史の主要なテーマとして扱われたことと深く関係する。また、義兵将の子孫たちが現在も地域社会で主導的な地位を占める場合が多く、先祖の業績を強調させるため実情を隠ぺいした側面も少なくない。<sup>78</sup>もちろん国難克服の教訓を壬辰倭乱から見出すことが間違っていると見ることはできない。しかし、朝鮮後期から最近まで韓国では、為政者たちが政治的目的で国難克服を強調、或いは利用してきた側面が強く、何よりも国難克服史観は植民史学に劣らず、歴史的事実を歪曲させて、特定の歴史像を強要したという点で問題があったと言える。

第二に、壬辰倭乱は朝鮮が勝った戦争という視点である。壬辰倭乱当時、朝鮮は初期の戦争で敗北しただけで、平壤城の戦いの後には、全体的に朝鮮が勝利したという主張である。戦争史の視点から見た場合、日本は戦争を起こした政治的な目的を貫徹できず、豊臣秀吉の野望は挫折した。結果的に、過去の事大交隣関係を回復させた点において、朝鮮が勝利した戦争として規定することができる。しかし、わたしたちが「朝鮮が勝利した」ということを強調する場合、朝鮮が戦場であったという事実

<sup>73</sup> 노영구, 「壬辰倭亂 초기 양상에 대한 기존 인식의 재검토-和歌山縣立博物館 소장 ‘壬辰倭亂圖屏風’에 대한 새로운 이해를 바탕으로」, 『한국문화』 31, 2003.

<sup>74</sup> 노영구, 「임진왜란 초기 경상수도 의병의 성립과 활동 영역-金海 의병부대를 중심으로」, 『역사와 현실』 64, 2007.

<sup>75</sup> 정두희·이경순 엮음, 앞의 책, 2007; 정지영, 「‘임진왜란’과 ‘기생’의 기억-한국전쟁 이후의 ‘논개’에 대한 상상과 전유」; 요네타니 히토시, 「사로잡힌 조선인들-전후 조선인 포로 송환에 대하여」; 하영휘, 「하왕산성의 기억-신화가 된 의병사의 재조명」; 존 B. 딘킨, 「임진왜란의 기억과 민족의식 형성-『임진록』 등 민간전승에 나타난 민중의 민족의식」; 정두희, 「이순신에 대한 기억의 역사와 역사화-4 백 년간 이어진 이순신 담론의 계보학」 등.

<sup>76</sup> 나동욱, 「부산왜성에 대한 고찰」, 『博物館研究論集』 19, 2013; 김정태, 「임진전쟁기 강화교섭 연구」, 고려대학교 대학원 박사학위논문, 2014.

<sup>77</sup> 사단법인 임진란정신문화선양회는 2010년 제정한 정관에서 “본회는 국가의 정통성과 정체성을 크게 위협당한 임진란의 위기 상황에서 국난을 극복하는데 지도적 역할을 하였던 인물 등의 업적을 역사적으로 재조명하여 위업을 추모하며 …”라고 설립 목적을 밝히고 있다.

<sup>78</sup> 오종록, 「여러 얼굴의 전쟁, 임진왜란」, 『내일을 여는 역사』 1, 2000, 82-84 쪽.

を見逃している。壬辰倭乱が終わった後、農耕地の被害を回復するだけでも1世紀かかったと推定されるが、これはわたしたちの社会の発展が戦争を経験していないときよりも相当長い期間遅れることになったことを物語っている。結論として壬辰倭乱を勝った戦争として見る観点は、事実を歪曲するものであり、外敵から国民を保護する任務を放棄した政権に対して免罪符を与えるに過ぎない。壬辰倭乱は朝鮮王朝が建国200周年ぶりに遭遇した大きな危機であったが、もう一方では、この危機を乗り越えることにより両班士大夫たちの支配を確固たるものにする結果となった戦争でもあった。<sup>79</sup>

第三に、壬辰倭乱は朝鮮で事大主義を強化させた戦争であった。事実、明軍が参戦した目的は、朝鮮を助けようとする純粋な意図であるより、朝鮮を戦場とすることがまして、平原地帯である遼東より山岳地帯が多い朝鮮で戦争をする方が良いと判断したからであった。戦争中、明軍の横暴とその後の内政干渉があるにもかかわらず、朝鮮支配層の間では、明を「国を再び造ってくれた恩人」として高く評価する観念が根強く定着した。壬辰倭乱で朝鮮の王と両班両方の権威は重大な打撃を受けたが、彼らは性理学の名分論を強く適用することにより、既存の支配体制をさらに堅固にすることができた。明に対する事大の強調で二度に渡る胡乱を経験し、百姓は大きな惨禍を被ったが、朝鮮王朝の支配体制はこれを通じて強化されたのである。

壬辰倭乱が起こった背景と関連して韓国では1960年代に入って日本国内の事情と関連して戦争の原因を探究し始めた。最近の韓国史教科書に相変わらず「16世紀末戦国時代の混乱を收拾し日本を統一した豊臣秀吉が国内不満勢力の関心を外に仕向けて、大陸侵略の野望を実現するために朝鮮を侵略した。」<sup>80</sup>という内容が書かれている。1980年代には、国際貿易と関連した利害関係を日本が戦争を起こした一つの原因であると指摘し、1990年代には西洋文物の刺激の中で日本が中国中心の事大交隣関係及び冊封と朝貢体制を軸とする国際秩序に挑戦するために起こした戦争であるという視角が提起された。2000年代に入って自国史に埋没された韓・中・日三カ国の壬辰倭乱認識を克服するために東アジア三カ国を網羅する国際的包括的な視角で壬辰倭乱を再検討しようとする主張が提起されている。<sup>81</sup>

しかし、壬辰倭乱を「一国史的視角」から脱して東アジアの視角から検討しようとする試みは日本の植民地期における玄丙周の著作からも見出すことができる。1980年代の半ば以降、韓国史学界では絶えず東アジアの視角を主張しているが、実際に成果と結びついていない。日本と中国においても同様で、韓・中・日三カ国の史料と研究成果を客観的に活用して研究した事例を見つけるのは難しい。韓国の場合、中・日の史料は言うまでもなく各地方の史料と各種古文書もまだ充分活用されていない。これは、韓国で壬辰倭乱を扱った本格的な通史が一冊もない実情とも関係する。<sup>82</sup>このような現状は韓国の壬辰倭乱研究が普遍的な歴史像を構築することに失敗したことを表すことであり、逆説的に忠実的な一国史的検討を通じて新しい東アジア共同体を志向する歴史像を確立する必要があることを示す。<sup>83</sup>また、そのための基礎作業として東アジア三カ国の重要資料を集大成し、それを詳細に注釈する基礎作業を形成して、比較史的認識を基に東アジア的視角で壬辰倭乱を客観的に見ることができるとを期待する。<sup>84</sup>

<sup>79</sup> 오종복, 위의 글, 87~88 쪽.

<sup>80</sup> 주진오 외, 『고등학교 한국사』(5판), 천재교육, 2018, 130쪽.

<sup>81</sup> 강응천·한명기 외, 앞의 책, 2014.

<sup>82</sup> 정구복, 「임진왜란사 연구와 한·중·일 중요 사료」, 『한국사학사학보』, 2016, 19~20 쪽.

<sup>83</sup> 노영구, 앞의 글, 28~30쪽.

<sup>84</sup> 정구복, 앞의 글, 21 쪽; 노영구, 위의 글, 30 쪽.

## 〈主要参考文献〉

[ ]内は、韓国語『著書名』・「論文名」の日本語翻訳である。

### 著書

- 이형석, 『壬辰戰亂史』 상·하, 임진전란사간행위원회, 1967(이형석, 『壬辰戰亂史』 상·중·하, 신현실사, 1974 등으로 증보개정).
- 한국사연구회, 『한국사연구입문』 (2판), [『韓国史研究入門』 (2版)] 지식산업사, 1987.
- 한명기, 『임진왜란과 한중관계』 [『壬辰倭乱と韓中關係』], 역사비평사, 1999.
- 이장희, 『壬辰倭亂史研究』, 아세아문화사, 1999(이장희, 『개정·증보 임진왜란사연구』, 아세아문화사, 2007로 개정·증보).
- 이민웅, 『임진왜란 해전사』 [『壬辰倭乱海戰史』], 청어담미디어, 2004.
- 한일관계사연구논집 편찬위원회, 『임진왜란과 한일관계』 [『壬辰倭乱と韓日關係』], 경인문화사, 2005.
- 조원래, 『새로운 觀點의 임진왜란사 研究』 [『新しい觀點の壬辰倭乱史研究』], 아세아문화사, 2005.
- 정두희·이경순 역음, 『임진왜란과 동아시아 삼국전쟁』 [『壬辰倭乱と東アジア三カ国戦争』], 휴머니스트, 2007.
- 한일관계사연구논집 편찬위원회, 『동아시아 세계와 임진왜란』 [『東アジア世界と壬辰倭乱』], 경인문화사, 2010.
- 한일문화교류기금, 『임진왜란과 동아시아세계의 변동』 [『壬辰倭乱と東アジア世界の変動』], 경인문화사, 2010.
- 이민웅, 『이순신 평전』 [『李舜臣評伝』] 책문, 2012.
- 강용천·한명기 외, 『16세기-성리학 유토피아』 [『16世紀—性理学ユートピア』] (‘민음 한국사’ 조선02), 2014.
- 김경태, 『임진전쟁기 강화교섭 연구』 [『壬辰戦争期講和交渉研究』], 고려대학교 대학원 박사학위논문, 2014.
- 현병주, 『수길일대와 임진록-망각된 저술가 현병주의 새로운 시각으로 쓴 임진왜란사』, [『秀吉一代と壬辰録—忘れられた著述家玄丙周の新しい視角から見る壬辰倭乱史』] 바오, 2016.
- 주진오 외, 『고등학교 한국사』 (5판) [『高等学校 韓国史』 (5版)], 천재교육, 2018.

### 論文

- 최영희, 「임란의병의 성격」 『史學研究』 8 [「壬乱義兵の性格」 『史学研究』 8], 1960.
- 김윤곤 「과재우의 의병활동-특히 조직과 戰術·戰略을 중심으로」 『역사학보』 33, [「郭再祐の義兵活動—特に組織と戰術・戰略を中心として」 『歴史学報』 33], 1967.
- 이재호, 「임란 의병의 일고찰-특히 관군과 명군과의 관계를 중심으로」 『역사학보』 35·36, [「壬乱義兵の仕事考察—特に官軍と明軍の關係を中心として」 『歴史学報』 35・36], 1967.
- 이장희, 「임란 해서 의병에 대한 일고찰-연안대첩을 중심으로」 『사충』 14, [「壬乱義兵に対する仕事考察—延安大勝利を中心として」 『史叢』 14], 1969.
- 최근목, 「임란때의 湖西의병에 대하여」 『논문집』 9. [「壬乱時の湖西義兵に関して」 『論文集』 9](충남대), 1970.
- 송정현, 「임진왜란과 호남의병」 『역사학연구』 4, [「壬辰倭乱と湖南義兵」 『歴史学研究』 4], 1972.
- 허선도, 「鶴峰先生과 임진의병활동」 [「鶴峰先生と壬辰義兵活動」], 『國譯 鶴峰全集』 (국역학봉전집편찬위원회), 1976.
- 유구성, 「壬亂時 明兵의 來援考-朝鮮의 被害를 中心으로」 『사충』 20, [「壬乱時義兵の來援考察—朝鮮の被害を中心として」 『史叢』 ], 1976.
- 최소자, 「임진란시 명의 파병에 대한 논고」 『동양사학연구』 11, [「壬辰乱時明の派兵に対する論考」 『東洋史学研究』 11], 1977.
- 이태진, 「임진왜란에 대한 이해의 몇가지 문제」 『군사』 창간호, [「壬辰倭乱に対する理解のいくつかの問題」 『軍史』 創刊号], 1980.
- 허선도, 「임진왜란론-올바르고 새로운 인식」, 『친관우선생 환력기념 한국사학논총』, [「壬辰倭乱論—正しく新しい認識」] 1985.
- 조원래, 「임란 해전과 흥양수군」 『남도문화연구』 2, [「壬辰海戰と興陽水軍」 『南道文化研究』 2], 1986.
- 나중우, 「임란의병과 장성남문 창의」 『향토문화연구』 4, [「壬乱義兵と長城南門倡義」 『郷土文化研究』 4], 1987.
- 정진영, 「임란전후 尙州지방 사족의 동향」 『민족문화논총』 8, [「壬乱戦後尙州地方士族の動向」 『民族文化論叢』 8], 1987.
- 고석규, 「정인홍의 의병활동과 山林기반」 『한국학보』 51, [「鄭仁弘の義兵活動と山林基盤」 『韓國学報』 51], 1988.

- 조원래, 「나주지방 사례로 본 임란의병 연구과제」 『나주목의 재조명』 (목포대 박물관), [「羅州地方事例から見る壬辰義兵研究の課題」 『羅州牧の再検討』 (木浦大学博物館)], 1989.
- 이장희, 「왜란과 호란」 『한국사연구입문(2판)』, [「倭乱と胡乱」 『韓国史研究入門 (2版)』 ], 지식산업사, 1987.
- 김석희, 「임진왜란과 청도지역의 창의활동」 『부산사학』 23, [「壬辰倭乱と清道地域の倡義活動」 『釜山史学』 23], 1992.
- 조원래, 「명군의 출병과 임란전국의 추이」 『한국사론』 22, [「明軍の出兵と壬乱戦局の推移」 『韓国史論』 22], 1992.
- 장학근, 「임진왜란기 관군의 활약」 『한국사론』 22, [「壬辰倭乱期官軍の活躍」 『韓国史論』 22], 1992.
- 박재광, 「임진왜란기 조선군의 화약병기에 대한 일고찰」 『군사』 30, [「壬辰倭乱期朝鮮軍の火薬兵器に関する仕事考察」 『軍史』 30], 1995.
- 이장희, 「왜군격퇴의 戰略·戰術」 『한국사』 29, [「倭軍撃退の戰略・戰術」 『韓国史』 29], 1995.
- 한명기, 「임진왜란 시기 명군 참전의 사회 문화적 영향」 『군사』 35, [「壬辰倭乱時期明軍参戦の社会文化的影響」 『軍史』 35], 1997.
- 노영구, 「선조대 紀效新書の 보급과 陣法 논의」 『군사』 34, [「宣祖代紀効新書の普及と陣法論議」 『軍史』 34], 1997.
- 강성문, 「행주대첩에서의 권율의 전략과 전술」 [「幸州大勝利における権嶮の戰略と戰術」 『壬辰倭乱と権嶮』 ], 전쟁기념관, 1999.
- 박재광, 「임란 초기 전투에서의 官軍의 활동과 권율」 『임진왜란과 권율』, [「壬乱初期戦闘における官軍の活動と権嶮」 『壬辰倭乱と権嶮』 ], 전쟁기념관, 1999.
- 오중록, 「임진왜란~병자호란시기 군사사 연구의 현황과 과제」 『군사』 38, [「壬辰倭乱~丙子胡乱時期軍事史研究の現状と課題」 『軍史』 38], 1999.
- 오중록, 「여러 얼굴의 전쟁, 임진왜란」 『내일을 여는 역사』 1, [「多面的顔をした戦争、壬辰倭乱」 『明日を拓く歴史』 1], 2000.
- 노영구, 「壬辰倭亂 초기 양상에 대한 기존 인식의 재검토-和歌山縣立博物館 소장 ‘壬辰倭亂圖屏風’에 대한 새로운 이해를 바탕으로」 『한국문화』 31, [「壬辰倭乱初期様相に対する既存認識の再検討——和歌山県立博物館所長「壬辰倭乱図屏風」に関する新しい理解を基にして」 『韓国文化』 31], 2003.
- 오중록, 「보통 장수에서 구국의 영웅으로-조선후기 이순신에 대한 평가」 『내일을 여는 역사』 18, [「普通の将帥から救国の英雄になるまで——朝鮮後期李舜臣に対する評価」 『明日を拓く歴史』 18], 2004.
- 조원래, 「임진왜란사 연구의 현황과 과제」 『새로운 관점의 임진왜란사 연구』, [「壬辰倭乱史研究の現状と課題」 『新しい視点の壬辰倭乱史研究』 ], 2005.
- 박재광, 「임진왜란 연구의 현황과 과제」 『임진왜란과 한일관계』, [「壬辰倭乱研究の現況と課題」 『壬辰倭乱と韓日關係』 ], 경인문화사, 2005.
- 정진영, 「松菴 金沔의 임란 의병활동과 관련 자료의 검토」 『대구사학』 78, [「松菴 金沔の壬乱義兵活動と関連史料の検討」 『大丘史学』 78], 2005.
- 한명기, 「임진왜란과 동아시아 질서」 『임진왜란과 한일관계』, [「壬辰倭乱と東アジア秩序」 『壬辰倭乱と韓日關係』 ], 경인문화사, 2005.
- 정두희, 「이순신에 대한 기억의 역사와 역사화-4백 년간 이어진 이순신 담론의 계보학」 『임진왜란 동아시아 삼국전쟁』, [「李舜臣に対する記憶の歴史と歴史化——四百年間繋がれている李舜臣談論の系統」 『壬辰倭乱 東アジア三国戦争』 ] 휴머니스트, 2007.
- 하영휘, 「화왕산성의 기억-신화가 된 의병사의 재조명」 『임진왜란 동아시아 삼국전쟁』, [「火旺山城の記憶—神格化した義兵史の再検討」 『壬辰倭乱 東アジア三カ国戦争』 ], 휴머니스트, 2007.
- 존 B.던킨, 「임진왜란의 기억과 민족의식 형성-『임진록』 등 민간전승에 나타난 민중의 민족의식」 『임진왜란 동아시아 삼국전쟁』, [「壬辰倭乱の記憶と民族意識形成——『壬辰録』等民間伝承に現れた民衆の民族意識」 『壬辰倭乱 東アジア三国戦争』 ], 휴머니스트, 2007.
- 노영구, 「임진왜란 초기 경상우도 의병의 성립과 활동 영역-金沔 의병부대를 중심으로」, 『역사와 현실』 64, [「壬辰倭乱初期慶尙右道義兵の成立と活動領域——金沔義兵部隊を中心として」 『歴史と現実』 64] 2007.
- 최원식, 「임진왜란을 다시 생각한다-『수길일대와 임진록』을 읽고」 『제국 이후의 동아시아』, [「壬辰倭乱再考—『秀吉一代と壬辰録』を読んで」 『帝国以後の東アジア』 ], 창비, 2009(『수길일대와 임진록』, 바오, 2016에 재수록).
- 노영구, 「임진왜란의 학설사적 검토」 『동아시아 세계와 임진왜란』, [「壬辰倭乱の学説史的検討」 『東アジア 世界と仁辰倭乱』 ], 2010.
- 손승철, 「『東國新續三綱行實圖』를 통해 본 임진왜란의 기억」 『임진왜란과 동아시아세계의 변동』, [「東國新統三綱実図」を通して見た壬辰倭乱の記憶」 『壬辰倭乱と東アジア世界の変動』 ], 경인문화사 2010.
- 이규배, 「조선시대 적대적 對日 인식에 관한 고찰-임진왜란~조선시대 말기를

---

중심으로」 『군사』 84,,[「朝鮮時代絶対的対日認識に関する考察—壬辰倭乱～朝鮮時代末期を中心として」 『軍史』 84] 2012.

김강식, 「조선후기의 임진왜란 기억과 의미」 『지역과 역사』 31,[「朝鮮後期の壬辰倭乱の記憶の意味」 『地域と歴史』 ],2012.

이태진, 「정조대왕의 충무공 이순신 숭모(崇慕)」 『충무공 이순신과 한국 해양』 제2호,[「正祖大王の忠武公李舜臣崇慕」 『忠武公李舜臣と韓国海洋』 第2号], 해군사관학교 해양연구소, 2015.

김강식, 「임진왜란을 바라보는 한국과 일본의 시각」 『지역과 역사』 38,[「壬辰倭乱を眺める韓国と日本の視角」 『地域と歴史』 38],2016.

김경록, 「임진왜란 연구의 회고와 제안」 『군사』 100,[「壬辰倭乱研究の回顧と提案」 『軍史』 100],2016.

정구복, 「임진왜란사 연구와 한·중·일 중요 사료」 『한국사학사학보』 , [「壬辰倭乱史研究と韓・中・日重要史料」 『韓国史学史学報』 ],2016

장연연(張燕燕), 「대중계몽주의자 현병주-그의 생애와 계몽담론, 『수길일대와 임진록』 에 대하여」 『수길일대와 임진록』 , [「大衆啓蒙主義者玄丙周——その生涯と啓蒙談論, 『秀吉一代と壬辰録』 に関して」 『秀吉一代と壬辰録』 ],바오,2016.